和合亮一講演会
「これからを生きるために・詩の礫」

和合亮一

（司会）
皆様ようこそおいで下さいました。まず、京都大学人間・環境学研究科・学際教育研究部部長の篠原資明先生からごあいさつ申し上げます。篠原先生は、ご自身、詩人でおられます。それでは篠原先生、よろしくお願いいたします。

篠原資明
ただ今ご紹介にあずかりました、滅多に詩人と呼ばれることがない詩人でございます（一同笑）。一応、学際教育研究部長ということで、偉そうな名前がついてますけれども、ともあれ、今日はみなさんようこそ、いらっしゃいました。
それより前に言うべきですけど、和合さん、荒井さん、どうも遠いところお越しいただき、ありがとうございます。
和合さんとは実は、今日初めてお目にかかるんですね。ただ、詩集のやりとりとか、あるいはお互いに、何か、書いたり、書いていただいたり、とかいうことで、活字を通しておつきあいってのはございました。まあとにかく、和合さんの詩集から、わたくし、感じてましたのは、たとえばですね、ページの余白ってありますね、上下左右の余白。それをものすごく、こう、詰めて使ったりすることがありましてね。何だこれはと（笑）。やっぱり、詩人というのは、ここまで常識破りでないといかんなあとゆうことで、最初からつよく印象に残ってございます。
今日は、いろいろ、本人さん、および、昔からのお知り合いでいらっしゃる荒井さんを通して、面白いお話、詩人の生の肉声ってものをお聞きいただけるんじゃないかなと思います。
わたくしちょっとだけコメントさせていただきますと、この『詩の礫』っていう詩集、今年一挙に三冊出た、その一冊ですけれども、皆さんおそらくご存知だろうと思いますけど、最初の方にですね、こんな詩句があります。

放射能が降っています。静かな夜です。

これを初めて目にしましたときに、正直言って負けた、と思いましたねえ。まあ、最初から負けてるようなものなのに今更なんだと言われるかもわかりませんが。三好達治のよく知られた短い詩にこういうのがございます。

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

この、三好達治の詩はですねえ、あの、蕪村の夜色楼台図、あの、東山の家々とおぼしきものが雪の中にあって、雪が積もっている状況を描いた有名な絵がございますが、三好達治はこの蕪村の絵を見ながらこの、「雪」っていう先ほどご紹介した二行詩を、書いたといわれています。

つまり何が言いたいかと申しますと、静かな夜といったら、我々はおおむね幸福な、非常に幸福なイメージ、を育んできたわけですね。それがこの和合さんの、一行の詩によって、趣がすっかりかわっちゃったと。ある意味日本の詩の世界に激震が走ったんじゃないかと。わたしは思ってます。まあその、激震詩人と申しましょうか（笑）：。これ以上しゃべると早く引っ込めといわれそうですので、引き下がりますけれども、どうぞ、皆様、4時まで、お楽しみいただければと思います。（拍手）

（司会）

篠原先生、ありがとうございました。それでは次に、荒井純さんから、和合亮一さんを紹介する言葉をお願い致します。

荒井　純

皆様初めまして。東京からまいりました荒井純と申します。

本日はこれから講演をされる詩人の和合亮一さんをご紹介し、またなぜ私が和合さんと、その書かれた詩にたいへんな魅力を感じたのか、すこしお話したいと思います。和合さんの詩を初めて読んだのは一九九五年の六月で、初対面がその年の十一月ですから、お付き合いは早くも十六年に及んでおります。その間、新宮さんに和合さんを紹介した日の晩に、私の家に和合さんが泊まったり、いろいろなことがありましたが、いま、まず何よりも私がお話したいのは、九五年の六月、初めて和合亮一という詩人の作品に接したときの、尋常でない興奮についてです。

蒸暑いその日に、私は現代詩の朗読会へ行き、そこで一冊の詩の雑誌をもらいました。寝不足気味だった私は帰ってきてから、寝転がってその雑誌のページを漫然とめくっていましたが、あるページで、それは六六ページでしたが、そこから見開き二ページ分、六九ページまで私はわが眼を疑うことばに出会ったのです。そのことばはまるで絵のようで、同時にものすごい勢いの音楽のようでもありました。ＣＯＭＥ.というタイトルの詩で作者は和合亮一という、初めてみる名前です。その詩を読み始めたとき、私は寝転がっていたわけで

すが、読み進めていくうちに、体を起こし、座り、読み終えたとき、私は完全に立っていました。そして立ったまま、この詩をさっき、初めて読み始めたときの衝撃的な興奮をもう一度享受したいと思い、何度も冒頭の部分を読み直しました。そのうち、妙なことに気付きました。初めて読んだこの詩の、まだ読み直していない半ばから終りの部分まで、私は「暗記」してしまっていたのです。その，COME，からすこし引用いたします。

硝子の車が火のような事故を続けている。
石炭の梯子が割れている。
水のようなレストランに明かりがついた。
石油の川が静かに涸れた。
紙の雨を見ているあなたのレントゲン写真。
（・・・）
奇妙な骨を抱えているねと見えない妹の骨は笑うのよ。
遺伝のように遊んでいたいときみの口紅は終わるのよ。
窓を叩く夜の妹には悪い雨を読ませ続けるの。
（・・・）
髪を燃やしている無人の妹と足を揃えて眠ると名前のある砂の夢が見えたわ。
性の後に僕も独りで足を揃えて眠るから切られそうで恐いの。
（・・・）

1

あたしの妹は髪を燃やしているわ、その肩越しに見える夜の髪だわ。頭の軽い夜に震えて愛し合う僕らは、雨の夢を見ているの。足のないズボンと形のないきみの鎖骨が恐い、性の後に僕は足を揃えて眠るんだ、
（・・・）
ねえドライブ　ズボンの縫い目を噛む　夏の穴　煙のように　飛ぶ畳
騒ぐ穴におびえる　口紅の川
（・・・）
紙の雨、苦々しく、生後を渡る、紙の雨、徹底的に、無人で、あり続ける、
（・・・）
柔らかな甥、高くて、危うい、柔らかな甥。夜の、送電線、細い、夜。

○電信柱ッ

引用を終りますが、これが私の、和合さんの書かれたものとの出会いでした。一体どこにそんなに興奮したんだと思われるかもしれません。しかし、「電信柱ッ」と叫ぶ現代詩など、そうそうあるわけではありません。それまで私が読んでいた現代詩というのはただ難解で、ちょっとナルシストか、あるいは自虐的な感じで、暗記できないどころかその時読んでいることばからどんどん忘れていく心理描写の羅列 ― 少なく

とも私にとってはそのようなものばかりでした。唯一の例外を除いて。

その例外とは高貝弘也さんという方の詩行で、この方は和合さんより三年ぐらい前に、新宮さんに作品をお見せしました。高貝さんについては、また別の話になりますので、ここでは詳しく申しませんが、一ついえますことは、よく陰と陽ということをいいますが、和合さんが猛烈な「陽」の詩人であるに対し、高貝さんはまったく、ひたすら「陰」の詩人であるということです。私は九十年代に、和合さんと高貝さんというたいへん優れたお二人の詩人に出会えたことを僥倖と心得ています。

さて、私は和合さんと高貝さんの詩の大ファンとなって、お二人の知遇を得て、非常に喜んでいたわけですが、ふと、当時親しくなり始めていた「遊戯空間」という劇団の代表で、演出家の篠本賢一さんという方に、このお二人の詩を見せてみたいと思いました。多分に実験的な気持もありました。そして、この俳優上がりの、極度にことばを大切にしている演出家が二人の詩にどんな反応を示すか、興味深く見守りました。演出家は目を輝かせて「これは面白い！」と叫び、驚いたことに次の公演はこの二人の詩人の朗読会にしたい、といい出しました。そうして成立したのが翌一九九六年十二月に行われた「波打際の文字～現代詩の突出を繰返す」という、いわば詩劇です。演出は私に任されました。

2

和合さんも福島から観にいらしてくれました。高貝さんもいらしてくれました。公演は成功のうちに終り、いま私が「遊戯空間」の文藝顧問などをつとめておりますのも、この和合さんと高貝さんを劇団に紹介したことがきっかけです。

この公演を初めて演出家という立場から観て思ったことはただ一つ、つまり、我々は二人の大詩人と出会ったんだ、成行きとはいえ、これは奇跡的なことだ、ということです。俳優の声に乗って、二人の詩人の作品は我々にそのことを確信させてくれました。そして「詩」というもののすばらしさ、詩の本性といったものを理解させてもらえたことに、我々は感動し、感謝したことでした。

さて、またはなしを和合さんに限って進めていきたいと思います。先程引用した，ＣＯＭＥ，という詩は、和合さんの第１詩集である「ＡＦＴＥＲ」に収録されていますが、この詩集が第４回の中原中也賞を受賞しました。九八年のことですから、「波打際の文字」の公演から二年後のことです。和合さんは華々しく詩壇にデビューされ、私まで有頂天といった気分になりました。一方この受賞前の和合さんの詩行にも私は相当に魅惑されました。やや順不同になりますが、再び引用させていただきます。

近所でしきりに手を振る人が見えたので恐くなったのです

鋭い近所でしきりに、手を振る人が見えたので恐くなったのです
近所では朝からキジが鳴いています
この平和な湯水の地下に、狂った池があると誰かは言っていました

その名前すらもかすかな粉状の、かびの女よ。

僕は誰の夢ですか？
僕は誰が見ている誰の夢ですか？
僕は誰が見ている誰の夢のなかの誰ですか？
僕は誰が見ている誰の夢のなかの誰が見ている夢ですか？
僕は？

きみはいくら眺めても思い出せないくらいきみによく似ている。

僕は水母に向って、冬の海の感情とはどのようなものかを、ガムを噛み噛み尋ねた。答はあるはずもないが、釘を打つ音がしばらく聞こえていた。

大人になってもガムを噛み続ける僕はうまく泳げない。

3

死後のテレヴィのCMばかりの番組よ　飛行機で家出をした小六の少女を映してくれ

死後のテレヴィが夢中で放送しているもの　それは
色のない駅の表から色のない駅の裏手へと
紫色の窓を背負って走ってゆく子供の「お使い」である
それは脅迫とは何かを知らない子どもだ

木のなかで揺れ動く木の葉に脅えるその子だ
家具のなかで笑いつづける引き出しに脅えるその子だ
紫色の窓のなかに優しい稲妻が落ちたばかりだ

「何を連れてここまで来たのか。」
―遊泳禁止を連れてここまで来た。ここから先は泳げないということへの想像の溺死。

前夜は紫色の傘立ての夢を見た。

僕は笑いながら笑った。すると。重大な形をした犬が正午の夜半を連れてきた。

赤い夢　白い夢
赤い僕が白い僕を抜けていく。

五十年後の花が、笑っているという情報が入った。

引用を終ります。和合さんのうしろにはたくさんの福島県の被災者がいらっしゃいます。そしてこの詩人はことばになりえない事態をことばにすることに力を竭(つく)している— 震災以来、ジャーナリズムはこのように和合さんを捉えているように思います。私達「遊戯空間」も、この七月の初旬に和合さんがTwitterでつぶやいたことば、すなわち「詩の礫」を台本として「つぶやきと叫び」という詩劇の公演を打たせてもらいました。しかし、和合さんという詩人はちょうど三十歳のときの中原中也賞受賞以来、というよりも遥かそれ以前の、同人誌に作品を載せていた、いわば無名不遇のときからこのかた、到底ことばになりえないことを「詩」に明快に表していた本質的な詩人ではないでしょうか? 本質的ということばは、いうまでもなく、詩人の資性に関ります。和合さんは詩に於て、既にはやく、いまの現実に出喰していたのではないでしょうか?

再び順不同となりますが、和合さんの、震災以前に書かれた詩行を引用します。

4

海は墜落した　山は叫び声をあげた　電信柱は無意味になり
倒れていった

津波の予報が鳩の声になる

かつて確かに窓のあったそれぞれの壁に何億もの海は倒れ込む

本日の太平洋が溢れてくる。船底のないタンカーが玄関で座礁している

聞き分けることの出来ない入道雲の衝突が　ああ　そら恐ろしい

水の法則は笑いながら狂ってゆく 間違ってばかりの黄色い
飛行機の青々とした影　に尾行される犬　を尾行する犬

液体のない液漏れが始まり続けている

雨の日に僕は絶対に外出しない　雨の日に僕は絶対に絶対に
外出しない

詩が爆発する　ふりつむ雪は瞬時にして爆発

引用を終ります。こうした詩行が、しかし「預言」といったものとはどうも違う気がして、和合さんに私は訊いてみました。福島に住む、生きるということは原発の恐怖が常に伴うものだったのかどうかを。和合さんは「…どうなんでしょうね…わかりません」と答えましたが、意識的であれ無意識的であれ、本質的な詩人と、ことばと、現実とは、すれ違い

つつ、知らないうちに急速に本来の、然るべき関係性を示して迫ってきた、とは考えられないでしょうか？いずれにしても和合さんは故なくして詩人になったのではない、と強く感じる次第です。

初対面の和合さんはまだ二十代の、明るい好青年でした。私は本人に会うまで、和合さんというかたは意外にご老人かもしれない、などと思っていました。私が‘COME’のあちこちを暗誦し始めると、和合さんは忽ち相好を崩して「あなたでしたか！」と叫ぶようにいいました。当時私は詩人の誰彼をつかまえて和合亮一を知っているか？こんな詩を書くんだ、といっては‘COME’を披露していたのですが、それが「東京で、どういうわけかきみの詩を暗誦してる人がいるよ」というかたちで、和合さんの耳にも達していたらしいのです。

年が明けると和合さんから、「これまで書いた詩を全部お送りします」というお手紙とともに、何冊もの同人誌が入った袋が送られてきました。私は狂喜してそれらを読み始めました。そしてまだずいぶん暗誦しました。私は記憶力が良いわけでは全然ないんです。和合さんの詩に夢中だったんですね。また和合さんの詩が、ホントにどういうわけかスラスラと頭に入ってきてしまうのです。

5

ほかの詩人で、そういう人はいません。あえて申せば、先程お話した高貝弘也さんの詩も一度読むと、なかなか抜けないものでしたが、高貝さんの詩が短いのに比べ、和合さんのは長いんです。詩の饒舌体なのです。にも拘らずという感じです。私は和合さんが故なくして詩人になったのではない、といいましたが、当時送ってくれた同人誌の編集後記に、和合さんはこう書いていました。

「僕は現代詩が大好きだ。読むのはもちろん、書くのも好きだ。」

こういうことを書く現代詩人も、珍しいというか、彼一人なのではないでしょうか。さらに別のところでは「孤立は怖い、いやだ。僕は詩の仲間が欲しい。」私はこの詩人こそMUSEに深く愛されて、いずれとてつもない活躍をすることになるだろうと、祈るように思いました。そして中原中也賞を与えられたとき、和合さんの受賞のことばにこうありました。

「私の詩のテーマは、実はこの生れ育った福島の大地である」

―そうだったのかと、私はただ感慨深く思っただけでした。和合さんは案外土着的なんだな、と思っただけでした。

最後に、和合さんがこの京都大学で講演をされるのは文化的にたいへん意義のある、すばらしいことだと思います。けれども、何も知らずに和合さんの詩をたのしんでいた仲介者に過ぎない私は、なんとも複雑な気持でおります。この講演会が行われることになった原因は、とにかく大惨事であります。ご存知のように和合さんの大切な郷里にあって、事態はいっそう複雑なことになっています。この有事国難のなか、私はいつか訪れたいと思っていたこの京都大学のキャンパス

で、新宮さんの主催で、お集まり下さった皆様の前で、旧知の和合さんを紹介しつつ、実のところ悄然たる思いを拭えません。― そう申すのがやっとです、というのが、いまの私の気持に一番近いかと思います。

(司会)：ありがとうございました。それでは、福島の今を生きておられる詩人、和合亮一さんからご講演をいただきます。

和合亮一

こんにちは。よろしくお願いいたします。三連休の最初の日に、お集まりいただきまして、ありがとうございます。ただ今、過分なご紹介をいただきまして、大変光栄に伺っておりました。大先輩の方々にそういう風にご紹介いただいて、ありがたく伺っておりました。今から約90分間…、胸がいっぱいでありながらも、お話しをさせていただきたいと思っております。

西日本の方に来てお話しをさせていただくのは、実は今日が初めてで、そういう意味では、ある感慨をもってお伺いいたしました。分ける必要もないでしょうけれども、東日本の方では、随分いろんなところで、お話しをさせていただいておりますので、伺ってみて、どんな気持ちで、今日お話しをしようかなってあれこれと考えてきました。タクシーの運転手さんが、いろいろ話しかけてきてくださって、どこからきたんですかぁっ？って言われて、どうしようかなっていうふうに思いながら「東の方から来ました」って言って来たんですが、なんていうか「福島から来た」と言っても良かったんですけども、なんとなく、ちょっと…、逆に色々と心配されちゃうんじゃないかな…という気持ちもあったりして…。福島の皆さん、自分の生活を今、それぞれがそれぞれの気持ちで過ごしております。これからわたしの正直な気持ちを、お話しさせていただきたいと思っております。

先ほどまで、震災前の作品について、なるほどと思いながら荒井さんの鋭い読みにドキドキしながら聞いておったんです。震災前と後とをなんか区別してしまうのもおかしいんですが、現代詩を書いてきたしこれからも書いていきたいと思っています。ただ目標が変わったって言いますかね、震災前は、詩というそのイメージといいますか、詩の歴史といいますか、そういうものに向かってずっと詩を書いてきました。そのことは今も変わらないんですけども…、今自分自身の目の前に立ちはだかっているものが、震災なんですね。そういう意味では言葉そのものがとても具体的に今なってきていると自覚しています。

今現在Twitterをやっているという方、ちょっと手を挙げてみてもらえますか？　おお、かなりいらっしゃると思います。ある会場ではTwitterやったことあるひとーって手を挙げてもらったら誰もいなかったっていうことがありました(笑)、それで、Twitterの話ができなかったってことがあっ

たんです。逆に東京の青山ブックセンターで、サイン会をさせていただいたときは、お客さんが２００人近く来て下さったんですけれども、全員Twitterをやっているという方々で、私のTwitter読んで下さっている方々ばかりでした。

嘘が言えない！と思いましたね。実は私は、Twitterというのは、どちらかというと、今現在もですけれども、苦手意識があります。パソコンのネットワーク自体に苦手意識を持っています。ですのでこれまでブログもやりませんでしたし、ホームページも持っていませんでした。Twitter自体も、始めたのはほんとに震災後なのですけれども、正直、目の前にそれしかなかったっていう状態で始めたんですね。今現在もTwitterについて、よく不手際なこともあったりして、読んで下さってる方に迷惑をかけてしまっていることもあります。

3月の11日の午後14時46分に、震災、大きな地震がありました。今日は京都のお住まいの方がほとんどでいらっしゃいますか？　遠くからいらっしゃってる方もいらっしゃるのかな。

こちらも揺れがあったと先ほど、うかがっておりましたけれど、福島というのは、もともと、岩と書いて、下にお城の「城」と書いて、岩城の国というふうに言われてまして、岩盤が地下にしっかりとあって、大きな揺れがあってもその岩が私たちの生活を守ってくれる、と言われていました。小さい頃から、じいちゃんやばあちゃんに、「福島は特に何にもないけど、地震がないとこだけはいいところなんだ」と言われ続けてきました。だから原発も建ってんだ、って言われて、なるほどと思ってきた訳ですね。

3月の11日の地震というのは、もう、自分の経験値を超えたものでした。いろんなところに、それを書きましたけども、ほんとに地面が馬の背中のようになって、揺れるんですよね。揺れるのも、ふわりふわりっていうか、こっちがあがってこっちが下がってという具合にですね。生き物の背中のような感じでした。それが断続的に続きまして、しばらく止んだと思ったら、また、始まる…。阪神淡路大震災の経験で、ああ、そうだったなあって思っていらっしゃる方もいると思うんですけれど、私はなにしろはじめてだったんです。職場で、会議をしていたんですね、私は、学校の教員、高校の教員なんです。入試の判定会議をしていて、そのときに地震に遭って、あまりにも大きくてみんなで呆然としました。一度机の下に入ったんです。しかし揺れはおさまらなくて、いよいよ駄目だと思ったときに、大きな声である先生が「逃げましょう」と叫んだんですね…。みんな窓から逃げたんですよ。芝生に出ました。上の3階のガラス窓が割れたりする音が聞こえました。立っていられないぐらいの揺れなんです。座り込んで女性の先生などは、涙ぐんだりしていました。それくらい大きかったんですね。

いま私自身、3冊本を出させていただいたんですが、この3冊出した中のひとつが、『詩の邂逅』というものです。いろんな被災者の方にインタビューをしています。本を出してからもなお、インタビューした経験が私の中でものすごく強く残っておりまして、引き続き、また別の一冊を今予定しています。今度は30人を目標。年内にインタビュー予定です。8人まで終わりましたので、後22人インタビューする予定です。

先週の日曜日、いわき市の方に講演に行きました。講演と一緒にインタビューをしないと間に合わなくて、講演が終わった後にお越しいただいて、3人ほどインタビューをしたんです。実際、いろんな話を聞いていく中で、震災ってこんなに大きなものだったんだなって改めて、思うことが大きいです。

半年経って少し静かに全体的になってきている中で、むしろそういう話を逆にいろんな方から聞くという行為の事実が、その当時のことを思い出す大きなきっかけを私にも与えてくれると確信しつつあります。生の声を聞いていると、涙が出てくるんですよね。お話しをしている方が、涙をにじませるんです。そして私もそれを見ると涙が出てくるんですよね。話をしながら、涙が出てくるって言うのは、これは精神心理学的に考察すると、一種の防衛本能によるものらしいんですね。

だから震災のショックを、その涙で止めて、心が流れ出してしまわないような、そういうことをしているんじゃないかなって思います。涙しながら、直感的にお互いに思っているような空気があるんです。私は、かなりいろんな講演会場で泣いてるんですよ（笑）。吉祥寺だったかな…、ある講演会と朗読をさせていただいたときに、なんか、ちょうど私の涙のバイオリズムのようなものが頂点に達していたのか、5分に1回くらい泣いていたことがありました…。

先ほどご紹介いただいた中で「詩の礫」という詩集があります。これが私が震災後に一番最初に書いた詩なんですけれども、今半年たって震災の時間が、自分の中で薄れつつある中で、これを読むとまざまざと思い出すんですね。だから、記録って、すごく大事なことなんだって改めて思うんです。この中で日記を書いていらっしゃる方、ブログを書いていらっしゃる方、たくさんいらっしゃると思うんですけど、ものすごく重要なことだと思います。この「詩の礫」を開くとですね、当時のことを思い出すっていうふうに言ってくださる方が、この本が出た直後よりも、半年経った今のほうが多い気がします。少しだけ読みたいと思います。

震災に遭いました。
避難所にいましたが落ち着いたので
仕事をする為に戻りました。
みなさんにいろいろとご心配をおかけいたしました。
励ましを、有り難うございました。
本日で被災6日目になります。

ものの見方や、考え方が変わりました。

二つの手紙を書いて、不特定の全然知らない方に、それを投函したと想像してみてください。Twitterは、1月の9日に実は始めているんですね。それで、1月の9日に9つほど書いているんです。ほんとに、つまらないTwitterです。フォロワーが、あなたのTwitter読みますよという、印を下さるんですけど、その当時で四人しか印をくれなかったんですね。はい。朝起きました、とか、今日はいいことあるかなって書いてるだけなんですね、四人しかいなかったんですよ。Twitterて、なんだか苦手だと思いました。

どうしてTwitterを始めようというふうに思ったのか…、大きな地震があって、様々なことが起きて、原子力発電所がああいう状態になって、福島は終わりだって思った時に頭に急にこのことが浮かんだのです。福島の方々はどんどん避難していって、地元のラジオ福島の放送から、避難している人への呼びかけの情報が流れるんですね。避難していく方々、どうぞ落ち着いて避難してください、あわてて避難して山道で車が止まってしまって、立ち往生している方がたくさんいます、どうぞ避難されるときには、落ち着いて避難してください…、そういう放送が入るんです。それを聞いて、ああ福島、ほんとにここまで来たんだな、終わりなんだなと思ったんです。

東日本全体、大げさに言うと、日本全体がこういう状況だと思っておりました。この時にどうしても詩を書いてきた自分の本能のようなものが前に出てきて、少しでもいいから、詩を残したいと思ったんですね。明日には避難…、自分にも強制避難命令があるのかもしれない…。

明日にはまた原発が爆発するかもしれない。今日のこの日のこの気持ちを、残したいと思いました。そこで唯一、すがるようにしてひらめいたのがTwitterだったんですね。興味がなかったのに、自分は何しているんだろうって思いながら、先ほどご紹介した様にふたつほど打ちました。

5日間、余震と放射能から逃げ回っていたわけです。実際に余震は1ヶ月の間に１００２回起きています。余震の4とか5などの強いものが、ものすごい頻繁に起きています。その余震と放射能の情報の中で、受動的・消極的な自分に…、もう心がなくなってしまったんですよね。どうなるんだろうって情報を見ていて、そしてその情報は、ジャジャジャーン、大爆発！、とかですね…、非常に大げさな、過剰な情報ばかりが繰り返されるんですね…、それを見ている福島の人たちはまず最初に追いつめられたのは、放射能の報道、つまり言葉ですね…、情報の言葉に追いつめられた。

3月の14日、15日というのは特に、原発の報道がものすごく過剰で、どうしようもない状況の中で、テレビを一日見ている人たちは、もう泣くしかありませんでした…。どうしようもなくて。泣きながらテレビを見ていました…。そういう中に私もいて…、ここまで20年間詩を書き続けてきて…、その書き続けてきた自分の思想のようなものがまったく無くなって、これほど自分はみじめで情けない存在だったんだっ

て…、思っておりました。

ところが3月16日にTwitterに言葉を投げ込んだときに、久しぶりに5日ぶりに文章を書いたんですね。頭の中で、ぐるぐると言葉が回って、噴火したんですね。言葉と言っていいのか、イメージと言っていいのか、意味って言っていいのか、よくわからないもの。だけど、つかまえたいもの、しかしつかまえられないもの、なんですね。

先ほど新宮先生とお話しをしていて、「地震っていうのは骨が記憶してるんですよね」とお話しをされていらっしゃいましたけれども、まさに骨で感じたことなのかもしれないですね。ここから先というのは自分の中で何も考えずに、指が自然に書き始めたかのような…、そんなところがありました。

行き着くところは涙しかありません。

私は作品を修羅のように書きたいと思います

この「修羅のように」というのは、実は宮沢賢治の詩「春と修羅」から来ているんですよね。だけど、このときは、私が初めて発語したかのようなそんな気持ちで書いているんですけど…。

放射能が降っています。

静かな　夜です。

ここまで、私たちは痛めつける意味はあるのでしょうか。

ものみなすべての事象における意味などは

それらの事後に生ずるものなのでしょう。

ならば事後、そのものの意味とは何か。

そこに意味はあるのか

この震災は

何を私たちに教えたいのか

教えたいものなぞ無いのなら

なおさら、

何を信じればよいのか

放射能が降っています

静かな静かな夜です

この一節もですね、実は中原中也の「静かです。今夜はほんとうに静かです」っていう一節から来ているんですけど、なんだか私が発明したみたいに、ここで書いています…。

一人ずっと部屋におりました。そのときに放射能の数値は18ミリマイクロシーベルトでした。とても高い放射能の数値でした。地元の番組で言っていました。「屋外から戻ったら、髪と手と顔を洗って、そして、着ている服は全部脱いで、ポリ袋に入れて、ひもで縛って、玄関に置いておくと、いいでしょう」と。びっくりしたのはですね、こういう異常な報道内容にも関わらず、BGMは明るい雰囲気なんですよね。ここでワンポイント・アドバイス…、「放射能ワンポイント・アドバイス…」みたいな形で「だと、いいでしょう」などというふうにおっしゃっていたり、あと、みなさんも耳にされ

たかもしれませんけど、直ちに影響はありません、とか…、
そんなことを繰り返し言われたり、あるいは避難をしている
方々に、呼びかけがあったりという内容が番組で続いたんで
すね。

屋外から戻ったら
髪と手と顔を洗いなさいと教えられました。
わたしたちにはそれを洗う水などないのです

私が暮らした南相馬市に物資が届いていないそうです。
南相馬市に入りたくないという理由だそうです。
南相馬市を救ってください

あなたにとってふるさととはどのようなものですか？

わたしは、故郷を捨てません。
故郷は私のすべてです

放射線は、直ちに健康に異常が出る量ではないそうです。
ただちに、を裏返せば、やがては、になるのでしょうか
家族の健康が心配です

わたしが、避暑地として気に入って
ときおり過ごしていた南三陸海岸に
おととい１０００人の遺体が流れ着きました

このことに意味を求めるとするならば
それは、事実を正視しようとする
そのいっときの静けさに宿るものであり
それは意味ではなく　むしろ
無意味そのものの闇に近いのかもしれない

今、これを書いているときに
また地鳴りがしました
揺れました。
息を殺して、中腰になって、
揺れをにらみつけてやりました。

命の駆け引きをしています。
放射能の雨の中でたったひとりです

あなたには大切な人がいますか
一瞬にして喪われてしまうことがあるのだ、
とすこしでも考えるのなら、己の全存在をかけて
世界に奪われてしまわない為の、方法を考えるしかない。

私の大好きな高校の体育館が身元不明者の
死体安置所になっています
隣の高校も。

また、地鳴りが鳴りました。

今度は大きく揺れました。
外に出ようと、階段の下まで裸足でおりました。

絶対安全神話はやはり絶対ではありませんでした。
大隈、広野、浪江、小高、原町、の町。
海、夜の6号線から見えた発電所の明かり、

家族は先に避難しました。
子供から電話がありました。
父として決断しなくてはいけないのか。

ところで
腹が立つ
ものすごく腹が立つ

どんな理由があって、命は生まれ、死ににいくのか。
何の権利があって、誕生と死滅はあるのか。
破壊と再生はもたらされるのか。

行方不明者は、「行方不明者届け」が届けられて、行方不明者になる。届けられず、行方不明者になれない「行方不明者」は行方不明者ではないのか。

避難所で20代の若い青年が、画面を睨みつけて、泣き出しながら言いました。

南相馬市を見捨てないでください。

あなたのふるさとは、どんな表情をしていますか。
私たちのふるさとはあまりにも歪んだ泣き顔です

この3月16日は、私の家族が山形に避難をしました。すごく悩んだんですね。いっぱい友達からも電話が来て、一緒に避難しましょうって誘ってくれたんです。で、京都に家借りたからとか、兵庫に家借りたからとかですね、とりあえず大きな部屋を借りようとかいろいろ連絡をくれたんです。

私には父と母がいますので、父と母に言いました。一緒に避難しようって。山形に家内の実家があるもんですから、そこにみんなで行こう…、と言いました。私の父と母は、お前達で行け、俺たちはいいから…、って。避難命令出たらどうするって聞いたら、隠れて住むって言って絶対に行かない。それで私は、やっぱり父と母を見捨てるわけにはいかない、と思いまして、残ったんです。

3月の16日の朝に家内と子供が山形に避難していきました。私は朝から学校に行っています。やっぱり学校が開いているうちはですね、行かなくちゃいけないなぁって思うこともあって、バスに乗って行ったんですね。戻ってきたら、テーブルの上に手紙が乗っていて、「お父さん、きっとまた会えるよ」って書いてあった。おおげさかもしれないが、この時に思ったのは、今生の別れですよね。

これからさらに大きな地震が起きるかもしれない、爆発が

起きるかもしれない。その前に言葉を残したいっていう気持ちがどこかにありました。恐怖と絶望が非常に強くありました。一応現代詩をずっと書いてきたこともあったんですけども、これまで書いてきた詩というのは、もう、私の中で瓦礫になってしまいました。すべて音を立てて崩れてゆきました。これまで書いてきた詩の、こういうものが詩だっていうふうにおもっていたものはすべてなくなってしまいました。

私が、Twitter で詩を書いていると、地震が起きます。玄関の外に逃げます。また戻ってきます。Twitter に書きます、また、地震が起きます。避難します。だんだん腹が立ってきます。地震の野郎って、地震めって思うんですね。いわゆるアニミズムっていうものの一種なのかもしれないんですけど、地震が生き物のように思えてきて、地球が、地中そのもの…、地面そのもの、大地そのものが、生き物のように思えてきて、地震に対して、ものすごく腹が立ってきて…、書こうとすると邪魔するようになってくるんですね。

これはずーっと、とにかく家族避難していて、引きこもりの状態で、3週間ほど家でずーっと詩を書いていましたので、いわゆる退行現象ってゆうんでしょうかね？　だんだん、幼い考えになってきているのか、地震に対して激しい怒りや、うらみをもつようになったりして…、ライバルのような気持ちになったりして…、詩を書いているうちに、また地震が起きる、また書こうとすると、また地震がある、あるとき思ったんです。

俺、地震、起こしてんのかなって…。ひょっとしたら俺が起こしてるかもしれないって…書こうとすると、良いタイミングで地震があるんですよね…。目の前で本棚から本が倒れたり、タンスが動いたりしてる中で、地震との、要するに、勝負ですから…。負けてられないと思って、どんなに揺れても俺は書き続けるよ、なんて叫んだりしてですね…、私は二階のアパートに住んでいるんですけど…、階段の下まで行ってですね…、一応は避難するつもりで、だけど、アパートのドアは開けないんですね…。

向こうはもう放射能のたまり場ですから。開けないんです…。閉めたまま、階段の下で、それで、Twitter で詩を書いてるんですね。で、また地震来てみろぉ、なんていうような気持ちで書いている…、するとまた来るんですよね。なんかそういうことを繰り返してるうちに、いつしか「悪魔」と言う言葉が私の詩の中に現れて来たんですね。詩を書いているうちに、立ち向かおうって気持ちにだんだんなってきたんですね。

すごく情けない気持ちで、逃げ回る気持ちで、何回も何回も、やってくる地震に逃げまどって、放射能の情報に、ハラハラドキドキしていましたけど、だんだんそういうものに対して、立ち上がろうって、闘いを挑もうっていうか、もっと原始的ですかね…。とにかく腹が立つから、怒りをぶつけようという、そういう気持ちで書いているんです…。だから、ある意味では自棄になっていたようなところが最初の始まりでした。5日も6日もずーっと書いている内に、自分の言葉の中に、夢とか、命とか、魂とか、信じようとかそういう言

葉が現れ出しました。先ほど読んだのは、3月16日ですけども、これは3月19日に書いています。

あなたの恋人は
家族は町は
山河はふるさとは
絶対か
いや、そう信じよう
あなたはこんなにもこれまで努力してきたのだから
わたしもそうだ

絶対などない
果物の皮を剥いても、いくら剥いても、何もない
何もないのだ
何もないのか
はたして

だから、あなた、
私の大切な　あなた
宇宙を、世界を、社会を、恋人を、
恐れながらも、ひとつひとつを
燃え上がるようにいきたほうがいい

もしも、夢があるのなら、必ず、実現したまえ
夢を追うのだ

ためらわず

いつ何のときに、この世界に
絶対がないことにまた、
気づかされるのかわからないからだ

ならば、あなたよ
そして、かならず
実現したまえ

はっきりと覚悟する
私の中には震災がある

こういうふうに書き始めているんですね。私の中には震災があるっていうふうに。燃え上がるように生きた方がいいって、書いているんですね。「あなた」っていうのは、この頃になると全国からたくさんメッセージをもらうようになったんですね。私の近くにいる人じゃなくて、遠くでこの私のTwitterを読んでくれている人…、たとえば、夢があるんだったら必ず実現したまえ、っていうふうに、こういう絶望の状況でありながらこういうふうなことを書いているんですね。

私自身も、これを書いて、びっくりしたんです。一晩で２００から３００のメッセージをいただきました。和合さんの詩を読んでいて、涙が出ました、静かな気持ちになりました、私も福島に両親を残してきて、心配しています、がんばっ

てください、っていうメッセージをたくさんいただきました。メッセージをいただいているうちに、私の中で、波立つものがありました。メッセージを読んで、波立つもの。この波立つものが、なんか、夢とか、命とか、生きるとか、そういうものを心の内側から語り出してきたように思うんですね。何か、教師として生徒を前にして話しをしているような自分の言葉が、強く出てくるようになったんですよね。

私は、南相馬市に6年間住んでいました。私が住んでいるのは福島市です。私は福島市生まれです。最初の初任地が南相馬市でした。南相馬市は、みなさんもニュースでご覧になられたかもしれませんが、物資が届かなかったところなんです。原発から近いということで、トラックが来なくなりました。

地元のテレビを見ていたら、避難所の若い青年が、画面を睨みつけて、こんなふうに言ってたんです。南相馬市を見捨てないでください…と、はっきりと、大きな声で。そして、そのあと泣きじゃくったんです。私はそれを見て言葉の力を感じました。詩を書いていて、それまで言葉の力を感じなかったかっていうと嘘なんですけども、だけど、この震災のときに、南相馬市を見捨てないでくださいってはっきり言って泣きじゃくる、南相馬市の若者を見て、こんなに当たり前の言葉に、力が宿るんだなぁって、思ったんです。

宿るということ。

実は私はこの大きな震災で変わったんです。言葉に何かが宿る。そのことを追いかけていくというのが、私にとっての今の詩の在処なんですね。「南相馬市を見捨てないでください」ってはっきりといったその若者のまなざしと言葉…。私もこれを聞いて涙していました。

私は南相馬市に教え子がいるんです。教え子から連絡がきました。まず電話が通じるとお互いに、おお、大丈夫だったかっ？　って言うんです。私の一番最初に担任をした生徒たちです。その後に、「家族はどうした」って聞くと、「大丈夫だった」というふうに答えが返ってくる場合もあるんですけど、「流された」って言う答えが返ってくることもあります。

そうすると言葉を返せなくなるんですよね。生徒の方が逆に私に気を遣っているのか…、「最後の半年、実家に戻ってきて、母親と暮らせて、とても良かったです」って、言ったんですね。これはそのまま今も心に残っています。あるいは私の教え子が番組で話をしていました。相馬には「相馬野馬追い」というお祭りがあります。これは大変、全国的にも有名なお祭りで、原町の、南相馬市の人口の3倍くらいお客さんがくるという、お祭りなんです。

彼は小さい頃から「相馬野馬追い」に出ていて、馬を大切に育てていました。ところが、津波で、家族と馬が、水に浸かってしまったんですね。それで、彼は、まず家族を避難させました。高台の方に、避難をさせて、そのあと、馬を連れてきました。無事に馬は、その時は助かりました。ところが、二週間後。水を受けた何かだったんでしょうね、死んでしまいました。番組は、その亡くなったところからはじまってる

んですね。

すごくやんちゃな彼でした。私は南相馬市の相馬農業高校というところで、教員をしていました。スポーツマンで、元気な生徒でした。そのときの話を語りながら、今回の震災で、亡くなった者と生き残った者と、はっきりと二つに分かれた。亡くなった者は、この世を去っていった者は、大勢いる。だけど俺たちは生き残った。これからこのことを自分の運命だと思って、生き残った者の運命を受け止めて、生きていきたいと思うって、彼なりのことをはっきりいったんです。そして俺たちはサムライだって言ったんです。そういって泣いたんです。馬は戻ってこない。だけどおれはサムライです。馬だって分かってくれると思う。俺はサムライとして生きていくって言ったんです。それが私の心の中に残っているんですね。

これもテレビで見かけた岩手の浜辺の場面です。女性と男の子が映っていました。女性は、その男の子のおばさんですね。その男の子のお母さんを探して、南三陸の海辺を歩き回っていたら、車の中でお母さんが、亡くなっていて…、それをたまたま見つけたんでしょうね…。女性が、ものすごく泣きましてね。男の子は、呆然としていて、泣いてないんですよ。

女性はものすごく泣いて、もう錯乱している状態ですね。近くの警察官が、女性のところにきて、そのうちのひとりが、肩を叩いて、大丈夫ですかって言ったら…、その女性がくるりと振り向いて、私は守るものがいっぱいあるから大丈夫だ、守るもんがいっぱいあるから大丈夫だって…、ずーっと言ってですね、生きていかなくちゃ駄目だから大丈夫だって、言ってですね…。それもすごく残っています。心に。

宿るものって、こんなに強いものがあるんだなって、思ったんですね。

言葉には力があるんだって改めて思いました。

そして声には明かりがあるんだって。

言葉には明かりがあるんだって思いました。

どんなにつらい報道を目にしても、どんなにつらい情報を聞いても、言葉には明かりがあって、私たちは暗闇で暮らしていて、やっぱり言葉が持つ、文字が持つ、明かりがなかったら生きていけないんですよね。

そういう明かりを頼って、ほんの小さな一筋の、ほんとのかすかな明かりを頼って生きてるんだ…。

だから、守るものがいっぱいあるから大丈夫だ…、って言って、画面の向こうで泣いて、私も泣いて、辛い言葉ですけれどね…。

でも、ああ明かりが欲しいって…、もっと欲しいって、思いました。

それで書き始めたのが、4月になってからなんですが…、『詩ノ黙礼』というものです。これは3月11日から1ヶ月経って、4月の11日から毎日書こうって決めて書きました。今話しをさせていただいた、津波の被害、そして、もうひとつは、放射能の恐怖。避難している方々のことを思って、毎日書こ

う、それを自分に課して書きました。そのことを自分に課してとにかく祈りを込めた詩を書こうと思いました。

4月の1日になってようやくガソリンが手に入ったんです。それまでガソリンは全然なかったんです。食料と水もなかったんですけど。それで、車があっても運転できなくって、それで、ほんとの極わずかに残ったガソリンで、「だましだまし」っていうんですけど東北では…、だましだまし運転をしていました。ほんとにもうワンメーターくらいしか残らなくなってしまったんですよね。ガソリンがどうもスタンドに来たみたいだって、風の噂で聞こえてくると、みんなそこに並ぶんですよ。だけど、ガソリンが入ってないんですよね。

みんな並んでいて、ガソリンがないよって、スタンドの方が拡声器か何かでいうと、みんなまた散り散りバラバラになる。そして、違うところで、行列を作っている。そうすると、ここでまたもらえるかもしれないって並ぶ。もらえないと分かる。また散り散りバラバラになっていく。あるときにものすごい車の行列を発見して、バスに乗ってたんですけれど…、これは絶対だと思って、うちに帰ってからガソリンを買いに行きました。車の列に並びました。1時間くらい。だけど、車が全然動かないんですね。これはガソリン、やっぱりもらえないって放送が、そろそろあるのかなぁって思っていたんですが、どうも様子がおかしいんですねぇ。

目の前の車、車の行列ですね。誰も人がいなかったんですよ。無人の車だったんです。何かというと、明日の朝スタンドにガソリンが入るという、情報があったみたいで。明日の朝にくるために、夕方から車を並べてるという状態で、無人の車だったんです。わたしはそれを知らずに、1時間待っていたんですね。

無人の車の後ろに1時間待っていたんです。誰も人がいないなって思って。それで翌朝早く行きました。4時くらいに行きました。無人の車は、相変わらず人がいませんでした。だけど後ろには、人が乗っている車が並んでいました、だからこれは絶対もらえるんだと思って、座ってました。

そうすると朝の5時から6時ぐらいに、家族に送られて、無人の車の持ち主がやってきて、車にみんな乗り込むんですね。7時ぐらいになると、おにぎりを作ってもってくる、家族なんかいたりしてですねぇ、あー、なるほどなぁって、家族ぐるみでいいなぁなんて思いながら見ていたんですけど…、なんかそういう思いをして、ガソリンを手に入れて、それで相馬の方に行くようになりました。

風が吹いてきたり、波音がしたり、しているものに、耳を傾けながら、津波の惨状を思い浮かべました。根こそぎ、家が亡くなって、そして住宅地跡も、まったく、それがなくなっていて、それを見ながら、どんなに大変な津波が起きたんだろうって、分かりました。

最初言葉が出ませんでした。改めて、出なかったんです。ずーっと家に閉じこもって、いっぱい大量に詩を書いてきたわけですが、それは家の中に閉じこもった内側のエネルギーでした。ガソリンが手に入って、外に行って、改めて瓦礫の町を見たときに、港町を見たときに言葉が出ませんでした。

私は何をしたのかというと、とりあえず写真を撮ろうと思いました。とにかくその周りの写真をいっぱい撮りました。そして、シャッターを切っているうちに魂を鎮めるようなことをしたいと思ったんですね。

私はやっぱり詩を書いているから、言葉で明かりをつくりたいと思ったんです。被災地に行って、亡くなった方と話をするように、詩を書きました。死者との対話っていうふうに、自分で思いながら、詩を書き続けたんですね…。

あるひとつの出来事があって…、番組で拝見したのですが…。南三陸の町で役場につとめるある女性が、高台へ避難してください、高台へ避難してくださいとずっと言い続けて、町の人々は高台に避難をして、しかしその女性は残念ながら津波に巻き込まれてしまったということがありました。

それを後日、その女性のお父さんとお母さんが、その記録映像をご覧になったんです…。その様子がニュースで流れていました。それが終わってすぐに、こんなふうに詩を書きました。

南三陸

役場に勤めている、ある女性は、必死になってマイクの前で、
最後まで、避難を呼びかけた。
南三陸。

黒い波が、あらゆるものを奪っても、
女性は必死になって呼びかけた。
高台へ。高台へ。
そして女性はそのまま帰らぬ人となった。
最後まで　最後まで、津波を知らせ続けた。
女性のご両親は後日に、まさに、
津波が押し寄せてきたときの、記録映像を見ていた。
波は、激しい勢いで、今、まさに、南三陸の町を、
飲み込もうとしている。
高台へ避難してください。
高台へ避難してください。
美しい凛とした声を聞いて、
お母さんはぽろぽろと泣いた。
まだ言っている。まだ言っている。

さらに黒い波、あらゆるものが、なだれ込んできた。

高台へ避難してください。
高台へ避難してください。

美しい、凛とした声を聞いて、お母さんはぽろぽろと泣いた
まだ言っている、まだ言っているよ。

あらゆるものがなだれ込む、黒い津波の映像は、
わたしたちに何を学ばせたいのか。

何を学ばなくてはいけないのか。

高台へ避難してください。

騒然とした非情な南三陸の町で、

美しい凛とした声は何百人もの命を救った。

声の明かりを頼って、
高台へ行こう、
高台へ行こう、と。

高台へ。
そこには、緑が群なす初夏の草原、

何も求めない、ただ胸いっぱいに吸うことのできる、
空気と、風がほしい
雲の切れ間。

高台へ。
振り向けば海原がまぶしい初夏の太平洋、
何も求めない、
ただ、胸、いっぱいにあふれてくる幸せの
涙がほしい。

雲の切れ間。

高台へ。

つい、その先の濁流の恐怖。

震えながら、人々は思う。

凛とした声明かりがもっと、ほしい。

もっと、心の高台へと誘ってほしい。

すべてを飲み込む、

怒りと、悲しみの渦。

南三陸。

高台へ。

黙礼。

黙礼とは祈るという意味なんですね。言葉を紡ぎながら明かりを求めたいと思ったときに、「黙礼」という言葉で綴っていきたいと思ったんです。「黙礼」というのをずーっと一ヶ月の間、書き続けてきて、祭礼っていう概念へと、やがて私の中で変わっていったんですね。

書き始めたときは、静かな心のまま書き続けていくんだろうと自分で、思っていました。ところが書き続けているうちに、命とか、魂とか、生きる、死ぬ、という問題は、激しさを伴う、むしろ激しいものなんだって思ったんです。

だから黙礼の概念とは…、祭礼、つまり、祀りということなのだという思いに、だんだん自分の心が変わっていきました。言葉で、やぐらといおうか、お祭りの建物を建てるような…、そういう気持ちになりました。激しい気持ちで書きました。

先ほどもお話をいたしましたがこの間、平行してインタビュー取材を始めました。

3キロ近くで、病院で看護師をしていて、看護部長をされていた方でした。そこは原発からも3キロくらいの距離にある病院です。原発が爆発したときには、ものすごい大きな音がして、地震だって思うくらいの地鳴りがしたって、言っていました。外にいた人は、ショックウェーブっていうんでしょうかね。体が揺れたって、髪が上がったって、言っていました。前髪が上がった人とか、体が激しく揺れたとか、病院の中にいた方は嘘でしょって笑ったそうなんですけど、外にいた人たちはみんなそう言ったって言っていました。

しばらくすると灰がふってきたそうです。空からたくさんの灰が降ってきたって。それだけ3キロ、4キロに灰が降ったんですね。もうひとつ、わたしが聞いて印象深いのは、今までかいだことのないいい匂いがしたって言っていました。どんな匂いですかっておうかがいしたら、甘い匂いなんだけど…、甘い匂いよりもいいにおいだったって言ってたんですね。

原発の爆発した付近では、そういう匂いが立ちこめていたそうなんですね。

そういう話しをどんどん聞くようになってきました。その後に『詩の邂逅』というものを、まとめるきっかけにもなっていったんです。

とにかく直接話しをどんどん聞きにいきました。森さんておっしゃる方なんですけど、機動隊も自衛隊も中に入れなくて、民間の我々で遺体を探して、それを今、集めてるところだとメールして知らせて下さった方なんです。

遺体を燃やす油がなくて困ってるんだ、というそういうメールを下さった方です。ガソリンが手に入ってまず一番最初に、その方に取材に行こうと思いました。テープレコーダー

を持ってカメラを持って行きました。話しを聞きました。やがて本に収められましたが、実はこの時点では何かに載るってことも関係なく、私自身が個人的に取材に行ったんですね。もういてもたってもいられない思いが、ツイッターに書くときと同じ衝動として心に起きたんですね。ガソリンが入って、私の気持ちも充満したんですね。

飯館村が全村避難のときにも、取材陣がものすごくいっぱい来ました。で、駐車場なんかもう埋め尽くされるぐらいいっぱい取材陣が来ました。その中に私も、カメラを構えて混ざりました。プロの記者の方々の脇で、わたしも取材をしました。

避難所にも行きました。例えば避難者のこんなつぶやきを、避難所に務める知人から教えてもらいました（「リクエスト」とは、ラジオ番組にリクエストしたいのだけれど…という意味です）。

聴きたい曲があるの
でも、リクエストできない。
泣いちゃう。
亡くなった息子がいて
その子が好きだったの。
巨人の星のテーマ。
その子の、思い出も何もないの。
写真も、新品のスーツも、探そうにも、20キロ県内だから、
もうもどれない。

70代の女性の呟きです。私はこの避難所に通って、被災してる方に話を聞きました。ある方は避難所に来たら鬱病になってしまって、周りの人がみんなすごく冷たいような気がするので、すごく悩んだって。誰とも話ししたくないっていう状況になったんです。

避難所に来られた方々、みんな、そういう状況に必ずなってるみたいなんですね。だけどあるときに隣の人にいっぱい話をした、もう1日中空っぽになるまで隣の人といっぱい話しをした、そしたら翌日から何かがんばろうって気持ちになったって…おっしゃいました。空っぽになるまで話し続けたら、よい言葉、よい言葉が大事なんだってわかった、っておっしゃってたんですね。

言葉っていうのは、橋をつくる、いい橋をつくれば、必ず向こうから、その橋を渡ってやってきてくれる、っていうことをおっしゃってて…、その避難所にいて、そういう暮らしをしながらですね、言葉の橋、いわゆる言の橋ですよね…、それを一生懸命、作るようにがんばってるんだって話しを聞きました。

南相馬市に取材に行きました。南相馬に残ってがんばっている若い青年の一人に…。飲み屋さんをやってるんです。唯一南相馬市で開いている居酒屋さんですね…。それをまた復活させたんですね…。彼は南相馬市の町中に、友だち三人でお金を出しあってですね、「ありがとう」と記した旗を立てたんです。どうして「ありがとう」なんですかってたずねました。南相馬市は大変で、しかも一時的に見捨てられたよう

になって、救援物資がこないような、そういうような思いもして…、どうしてそれなんですかって訊ねたら、そう言えば誰もが頭を低くしてくれる、敷居を低くしてくれる…。それを言えば、必ず敷居を低くして、こちら側で待ってる我々に何かを、与えてくれる…。むしろ「ありがとう」って言葉を南相馬市に宿したい、流行らせたい。そういうことを教えてくれたんです。

南相馬市で、みんなが「ありがとう」って言ったら、こんなにひどい思いをしてきた我々が、それを言い続ける思想を持ったら、世界中からわたしたちに会いに、みんなが来てくれる…。南相馬市を、日本のパワースポットに、力があふれる町にしたいと思ってる…。

人が全然いない町ですよ。子供がいっぱい避難して、そして、草がたくさん生えてるその町で、若い青年たちがそういうことを言っているんです。ものすごく今も胸に残っています。教えられました、まっすぐな眼の青年たちに…。

いま福島はどういう状態なのか。残念ながら3月11日から、一歩を踏み出せていない、そういう状態です。

鈍い痛みをずっと抱えている。磐城の漁師さんなどは、一度も、行政の人も東電の人も国の人も漁業組合に来てもらってないと教えてくれたんですね。いわき市の漁業組合にですよ。とても信じられなくて、組合長さんにもお伺いいたしました。きっぱりと一言。「一度も来てない」って…。東電も、いわき市も、国も来ていない。そしてどうぞ漁をしてくださいって言われるだけなんだって。漁をしにいって、魚を捕ってきても、どの港も福島の魚はお断りって言われる。だけど、漁はしていいんだよって言われる。こういう状況なんです。野放し状態です。ぜんぜん保証も何もないんですよね。

日本っていうのは、こんな貧しいものなんだ、日本の社会っていうのは、こんなに冷たいものなんだ。こういうふうに今回の震災で思っています。

それは例えばこういうことなのかもしれないです。日本というのは侵略されたことが一度もない国家です。だから本当の意味で、例えばヨーロッパの詩人達は、侵略された経験で詩を書きました。だから叙事詩が多いです。事件を、言葉にしています。だから、日本の詩と比べると、こういうときに戦争があった、こういうときに誰かが処刑された、こういうときに哀しいことがあった、それを、下敷きにして、ヨーロッパの詩というのは、成り立っている部分が非常に多いです。

だけど日本の詩というのは、歴史が浅いこともあって…、明治時代から始まっていますので歴史も浅いんですけれども…、基本的に事件の上に成り立つという詩というのはほんとに少ないです。そういう意味では、日本の詩は、叙情の文学になります。

それに対して、叙事ですね、つまり出来事に対する詩というのが、どうしてなかったのか。今この状況になって、思うことが大きくあります。

悲しみを、もう超えた状態になっている人がたくさんいま

す。暮らしを奪われ、ふるさとを奪われ、生業を奪われ、それなのに、何の保証の約束も受けていない。そういう方がたくさんいます。しかし悲しみを超えた悲しみを、表現する言葉が日本語にないんです。

悲しみを超えた言葉がこの国にはないんです。

私たちが直面しているこの状況は、悲しみを超えたところにあります。

半年も悲しみが続いていて、鈍い激しい痛みが続いていて、しかし悲しいって言う以外に、それを語る言葉が日本語にない。

ある意味、福島のみならず、日本の文化、例えば、広島の問題、沖縄の問題、反対に戦時中などにアジアへ及ぼしてきた日本軍の問題、あるいは、国内の様々な公害の問題、そのすべてに日本人はふたをしてきました。

私は、そんな風にこの半年で思うようになりました。

悲しみを、苦しみを、罪を、受け止めきらずに、次に向かっていく。高度な成長に向かっていった社会の弊害なのかもしれないんですけれども、次から次に、追われていって、悲しみを、喪失を、受け止めきらずに、過ごして来たのです。

ふたをされていくような気持ちがあります。

福島の県立博物館の館長さんの赤坂憲雄という現代を代表する民俗学者がいますが、この方が早いうちにはっきりと、つらいひとことを新聞に書きました。

福島は植民地だった。

私はこの一言に触れた時に、あらためてショックを覚えました。だけど半年経って、今、ふたをされそうな時間の中にいて、植民地だったのかもしれないと思うことが日増しにあります。

本当の意味で植民地的な、あるいは、奴隷的な生活をしてこなかった日本の文化というのは、同じ国に植民地を作っておきながら、その植民地を表す言葉がないんです。

だから私たちはどうすればいいのか…、ただ黙ってるしかないのでしょうか。

福島の我々はそんな沈黙の時間を今、過ごしているような感触があります。

だけど私は、悲しみを超えた感情が必ず生まれるっていうふうに今、思ってるんですね。我々の国土、日本のこの国の、ある部分が奪われて喪失したわけですね。

その中で、ずっとこれを抱えていかなくてはいけない。

それは、悲しみの先にある…、なんなのか…、ということがまだわからないんです。　しかし新しい感情が生まれるとしたら、それが未来の何かを、救い出す鍵を握っているのかもしれない。

だったら、やっぱり私は言葉で悲しみ続けて、言葉で怒り続けて、言葉で何かを失い続ける、そういう覚悟で、書き続けるしかないんじゃないか。

受けとめる覚悟。

受けとめることを余すことなく受けとめる。
その中で何かが見えてくる。
何かが宿ってくる…、そういうふうに思うんです。
強い国でも美しい国でも豊かな国でも、あるいは曖昧な国でも、日本はない。
ただただ冷たい国だって思う時があります。
大病院のような安心感のある、そういう国だってずっと思ってました。何か困ったことがあったら絶対に、この国は助けてくれる、なんか大きな病院にいるような…。
一度中国に旅行に行って、日本に戻ってきたときに、ああすごく病院の中にいるような安心感を覚えたことがありました。いや、中国も素晴らしい国ですけど…、チベットの近くの大自然地帯を見てまわってですね、こっちに戻ってきたときに、日本は安心の国なんだなって思っていました。
だけど野戦病院のような、そういう国になってしまった…、そういう印象を持ちました。効率が悪いからとか、人手不足だとか、しょせん野戦病院なのだから治療はここまでで見納めましょうっていう雰囲気が、たとえば震災時には強かったように思います。
それを受けとめながら、何をするのかということを改めて考えています。
だから、そのことを突き詰めていくと、最後は絶望と悲しみになるのか…というと、そうではないと思いたいのです。
例えばこれがチャンスなんだって言う方がたくさんいます。
あるいは福島の我々が大人の時代でよかったね、自分たちの子供の時代じゃなくってよかったね…、子どもたちにいいものを残せるようにがんばろう…って言う人がたくさんいます。
そういうものの中に宿る鍵のようなものがあるんじゃないかと思っているんです。
私は、みんなと一緒に、やれることを一生懸命やって…、仕事をきちんとして、精一杯に、燃え上がるように…、福島で生きて…、行動して、確かな思想を求めて…、求める、たどりつく…、それで満足するんじゃなくて…、さらに行動を起こして、そこに新しい思想を宿らせていくような…、そういうことをみんなでしていきたいって思っています。
そういう意味では、福島に、これからも残り続けていきたいと思っています。
そういう思いを込めて、三月十九日の絶望の中で書いた詩を、最後に読みたいと思います。

決意

福島に風は吹く
福島に星は瞬く
福島に木は芽吹く
福島に花は咲く
福島に生きる

福島を生きる
福島を愛する
福島をあきらめない
福島を信ずる
福島を歩く

福島の名を呼ぶ
福島を誇りに思う
福島を子供たちに手渡す
福島を抱きしめる
福島とともに涙を流す

福島に泣く
福島が泣く
福島と泣く
福島で泣く

福島は私です
福島はふるさとです
福島は人生です
福島はあなたです

福島は父と母です
福島は子供たちです
福島は青空です

福島は雲です

福島を守る
福島を取り戻す
福島を手の中に
福島を生きる

福島に生きる
福島を生きる

福島で生きる
福島を生きる

福島で生きる
福島を生きる

風、雨、花、海、子供の髪、私たちの暮らし、

山、鳥、鹿の鳴き声、雲の切れ間、風、風のささやき、

命、生きていく、今を生きる、私たちの足跡、

川、大河、海へ、海へ流れ込む、波、

美しい船、一艘の船、

美しい帆、愛する人

手を取りあって、手をつなぎ、

あなたとわたしをあきらめない、

生きていく、命、魂、風、花、鳥、福島、雲、雲の切れ間、

宇宙、空、子供の髪、指、手のひらのぬくもり、

あなたをあきらめない、わたしをあきらめない。

福島を生きる
福島で生きる

福島に生きる
福島を生きる

ありがとうございました。

（拍手）

（司会）

和合さんありがとうございました。今日は、福島から、我々のつかっている日本語に明かりをともして下さるお話をいただきました。大変ありがとうございました。

後記

本稿は、二〇一一年十月八日、京都大学大学院人間・環境学研究科棟地下大講義室において、人間・環境学研究科・学際教育研究部と新宮一成・精神医学的精神分析プロジェクトの共催で行われた、「和合亮一講演会」の記録である。当日の司会は同研究科人間社会論講座・新宮一成が、また録音からのトランスクリプションは同研究科共生人間学専攻博士後期課程・岡田彩希子が担当した。